

信州須坂藩心学資料とその言語

大橋 敦夫

はじめに

今日の日本語共通語における口語文体の源流は、どこに求められるであろうか。「共通」であるためには、地域方言を含まず、より多くの人々に理解されることが必須の条件となる。この条件に合う文献資料を過去に求めると、以下のものが浮かび上がってくる。

すなわち、室町期の抄物、江戸期の講義物・説教・心学道話、明治期の講義物・演説である。いずれも、地域にとらわれず、また、不特定多数の人々を対象として成立している。その言語は中立的であり、共通性が高いと予想される。

いわば実用物とも言うべき、これらの資料について、森岡健二氏は、「抄物→江戸講義物→明治講義物→演説→標準語」という口語の系譜を示された(注1)。

この森岡氏の洞察に基づき、抄物の言語について分析してみたところ、講者や資料の成立地によって、関西系と関東系に分けられる抄物も、言語面では、ともに中立的な語法を持っていることが確かめられた(注2)。

また、心学道話の言語を分析された森岡氏は、次のような結論から、心学道話も先の系譜に入るとされている。すなわち、

「方言的特色が希薄で、位相性もなく、しかも文語的あるいは文章語的要素を加味している点、道話の口語は、中立性の高い口語である」

「この(『道話の』)文体は、話し言葉を下敷きにした文章表現、あえて言えば、当時における共通語に基づいた言文一致体とでもいふべき性格のものであろう」

というものである(注3)。

森岡氏が分析に用いられたのは、次に掲げる資料である。

道二翁道話一五巻 中沢道二著・八宮斎輯 寛政六・文政七年
道二翁道話続編八巻 中沢道二著・平野橘翁輯 天保一四年

弘化四年

松翁道話一五巻 布施松翁著・八宮斎輯 文化一一年

鳩翁道話九巻 柴田鳩翁著・嗣子武修聞書 天保五年

続鳩翁道話三巻 同 天保六年

続々鳩翁道話三巻 同 天保九年

心学道の話八編 奥田頼杖講話・平野橘翁聞書 天保一四年

これらは、中沢道二・布施松翁・柴田鳩翁・奥田頼杖等、いずれも心学史上著名な人物の手になるもので、いわば全国区の資料と言える。森岡氏の結論は妥当なものであり、揺るがないと考えられ

るが、反論が出るとしたら、この点であろう。

そこで、地方区の資料——地方に残された心学（道話）資料——を用いて、心学道話の言語を分析してみようというのが本稿の目的である。

対象資料として、信州須坂藩関係の心学資料を扱う。心学というと、始祖石田梅巖以下、庶民的なイメージが付きまとうが、子供や当時教育の機会に恵まれなかった女性、さらには武士層をも取り込み、位相性を凌駕する勢いを持った。そんな時代の空気の中、信州の須坂藩でも、庶民はもとより、藩士にも心学に傾倒するものが現れる。なかでも、九代藩主堀直皓は、「心学大名」とまで言われるようになり、藩士や庶民の教化に心学を用いた。そして、彼の設立した教倫舎（天明末年頃）は、「藩校代用の教育機関として使用せられた心学史上に特異な存在」となった（注4）。

現在のところ、教倫舎関係の心学（道話）資料が九点、明らかにされている（注5）。詳しい紹介はII章に譲るが、いずれも信州は須坂において成立した地方区の資料である。卑近通俗にして解しやすきを信条とした心学（道話）に、どのくらいの卑近な語——方言——が記録されているか、興味あるところである。

地域性が強いにもかかわらず、その言語の分析結果が、全国に行した資料の分析結果と一致すれば、森岡氏の結論の妥当性が確認できることになる。以下、近世期の信州における心学の普及および須坂藩における心学の展開状況を概観し、教倫舎関係の心学（道話）資料の言語分析を行なうことにする。

I 信州の心学と須坂藩の心学（注6）

【素描・信州心学史】 始祖石田梅巖の後を受けた手島堵庵の活躍に

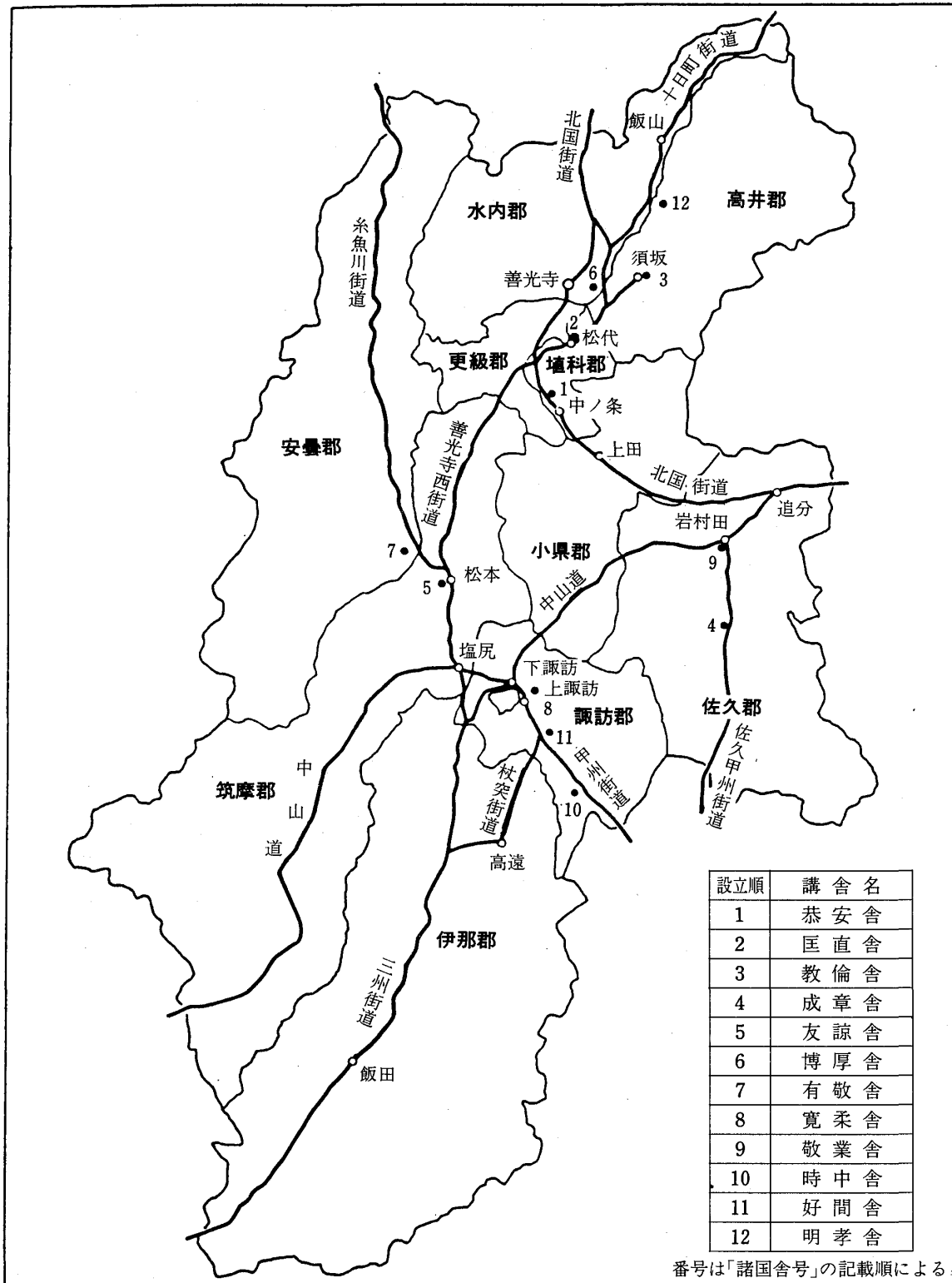
よって、心学は隆盛期を迎える。心学発祥の地京都には、堵庵の自宅をあてた五落舎のほか、明倫舎・脩正舎・時習舎の三舎ができ、この三舎が本山となった。堵庵は、師梅巖の思想を生活哲学として平易化するとともに、同志が集まって切磋琢磨する梅巖以来の月例研究会を会輔とし、会輔にあてる講舎の制を立てたのである。

そんな折、一人の信州人が明倫舎での心学講釈を聞く。糸商人として京都へ往来していた中村習輔である。習輔、本名庄八は、享保一七（一七三二）年、埴科郡下戸倉村柏尾（現戸倉町柏王）に生まれた。青年時代は、天明俳諧中興の祖・加舎白雄（カヤシラオ）について学び、白雄門下の俊秀として期待されたが、同郷の高弟宮本天姥と争うのを嫌い、俳諧から遠ざかったと言われている。明和八（一七七二）年には、堵庵に入門。一〇日余りで門人録に記され、三舎印鑑（認可証）と都講（講釈の主催者）の印鑑を受け、独り立ちできるまでになった。

帰郷後、直ちに布教活動を開始したとみられ、安永六（一七七七）年の門人帳が残されている。天明六（一七八六）年からは、年間を通じた本格的な教化活動となり、自宅にも全国で二八番目の講舎「恭安舎」の設立を認められている。習輔の活動範囲は、ほぼ信州全域に及んでおり、埴科・更級・小県・筑摩の四郡二二か村、および信州一〇藩のうち、松代・須坂・上田・小諸・松本・飯田の六城下に足を伸ばしている。その結果、彼の指導下にあると認められる心学講舎が六つ誕生している。すなわち、匡直舎（松代城下）・教倫舎（須坂城下）・友諒舎（松本城下）・成章舎（佐久郡高野町村）・博厚舎（水内郡北尾張部村）・有敬舎（安曇郡岩岡村）である。

ことに須坂藩の教倫舎に関しては、設立以前から指導的役割を果たしており、習輔の存在は誠に大きい。（表1・2参照。）

表1 信濃国における心学講舎の所在



(『長野県教育史』第7巻 692頁より)

表2 信州の心学講舎一覧

舎号	所在地	設立年代	設立者	概 要
恭安舎	埴科郡下戸倉町柏尾 中村習輔自宅内	天明五年か	中村習輔	信州最初の講舎。天明末・享和・文化ころ隆盛。文化一三年習輔没。中島玄洞・北沢弥長治ら舎主となるが、衰微。
匡直舎	埴科郡松代城下 興津湖山邸内	天明五年一〇月	興津湖山	寛政一一年までに社中二六八人を数える。いずれも中村習輔の門人。湖山の没後（享和二年）、自然衰亡。
教倫舎	高井郡須坂城下	天明末年	藩主堀直皓	藩費にて設立。文化年中、匡直舎中とともに中村習輔の教えを受ける。
友諒舎	筑摩郡松本城下	寛政五年頃	内山友諒か	友諒文化年中、中村習輔に学ぶ。文政年中に中絶。天保のころ林戯雲が復興をはかるが不成功。
成章舎	佐久郡高野町村 （のち入沢村へ移る）	寛政五年	高見沢監物	中村習輔の門人（高見沢一族か）の設立。文政年間に廃絶か。
博厚舎	水内郡北尾張郡村	寛政七年	浅野勘兵衛 勘五郎	中村習輔の遊説が契機となって設立されたい。
有敬舎	安曇郡岩岡村	寛政九年	岩岡喜代三郎	岩岡一族の設立。中村習輔の門人。文化のころも存続。
寛桑舎	諏訪郡神宮寺村	寛政一二年頃	岩波堯山 堯甫	ともに植松自謙の門人。寛政九年から文化六年まで、ほとんど毎年自謙を迎えて活動。文政期も活動していた。
敬業舎	佐久郡赤岩村	寛政一二年	不詳	寛政七年頃以来、習輔・自謙・中沢道二来講し、自謙の指導の下に成立。文化年間も活躍。
時中舎	諏訪郡松田新田	文化七年九月	名取与兵衛ほか	自謙の没後、名取与兵衛ら一四名で設立。いずれも自謙の門人。文政期以降も継続繁栄。
好問舎	諏訪郡粟沢村	文化八年	小池要五郎	自謙門人の小池要五郎設立。
明孝舎	高井郡壁田村 馬場了本自宅内	天保六年一〇月	馬場了本	恭安舎及び教倫舎、江戸参前舎の支援を受け設立。一時隆盛なるも、安政二年了本没後、衰亡。

〔長野県教育史〕第一巻・小杉巖氏『信州回想―随想と論文―』より

信州心学の祖ともいべき中村習輔と同時代に活躍した、信州出身の心学者がもう一人いる。諏訪郡瀬沢新田（現富士見町）出身の植松自謙である。農家に生まれついた自謙は、一六才の時に江戸へ出ていったん帰郷。再び江戸に出てからは、出雲屋和助と称して貸本屋を営んだ。商売のかたわら、昌平坂学問所の講義を聴講していた。

当時、江戸には堵庵の命を受けた中沢道二がおり、参前舎を本拠に活動の手を広げようとしていた。道二は、梅巖の社会批判の面と堵庵の主観的人生哲学の面を融合統一。心学は生活学と人間学の二つの性格を持ち、一般町民はもとより、農民、さらには大名・旗本その他の武士層にもひろく浸透していく。

寛政元（一七八九）年、好学の士自謙は、道二による参前舎開設の際の道話に感激。即座に入門し、以後道友とともに参前舎の興隆に尽くすことになる。その足跡は、奥州・上州・甲斐・越後・紀伊・中国・四国に及んだ。道二没後は、参前舎の舎主を大島有隣と隔年で勤めるまでになっている。

故国信州へは、寛政五・六年頃、甲斐に開いた存心舎を足がかりに毎年来讲し、彼の影響下にあった諏訪・佐久に四つの講舎ができた。すなわち、寛桑舎（諏訪郡神宮寺村）・敬業舎（佐久郡赤岩村）・時中舎（諏訪郡松目新田）・好問舎（諏訪郡栗沢村）である。

その後、習輔・自謙に次いで信州を広範に布教するものは、ついに現れない。両者の没後は、全国的にも心学の教勢が分裂し、衰退へと向かう低調期となった。新講舎の設立も、恭安舎・教倫舎の援助を受けた明孝舎（高井郡壁田村）一舎のみで、幕末に向かって衰亡を待つばかりの講舎が多くなった。京都・江戸からもたらされ、信州に花開いた心学の終焉である。

【須坂藩の心学】 以下、須坂藩の心学について、その歴史を揺籃期・教倫舎設立期・隆盛前期・隆盛後期・衰退期の五期に分けて略述する。

〔揺籃期〕須坂町近辺は、中村習輔の活動範囲にあり、彼の門下帳「恭安舎社友記」には、須坂藩家老丸山巨宰司のほか、須坂藩士四名と領民三八名（内女性九名）の名が見える。天明六（一七八六）年頃に行なわれた、習輔の須坂町近辺巡講の成果と考えられる。以後、習輔はしばしば須坂に足を運び、その影響力を強めている。

また、隣接する松代藩士興津湖山の影響も及んでいる。湖山は、習輔の門人でもあり自宅に匡直舎を設け、士民の徳性の向上を図っていた。その匡直舎「心学社中名目覚」の天明八年の条には、須坂藩士富田魯庵ほか須坂近辺在住の者四名の名が記されている。

習輔・湖山の影響下、須坂周辺に心学が興隆する一方で、江戸詰の藩主・家臣たちにも心学が広まっていた。

中沢道二が江戸に参前舎を開設した天明元（一七八一）年に、前出の富田魯庵は藩主にしたがって江戸におり、道二から琢磨礼（門下認定証）を得ている。ほかにも、道二のもとへは藩士亀田弘人が出入りし、社中となっていた。弘人の修養もかなりのものであったらしく、道二から、藩内はもとより、国もと須坂での布教を依頼されている。

これら家臣たちの心学修養と時を同じくして、九代藩主直皓の修養も始まっている。直皓は寛政元（一七八九）年に大阪城加番を拝命しているが、この加番中に、同僚とともに心学者中井利安（手島和庵の名代）を城中に招き、会輔を開いた。そして寛政二年には、断書（奥義認定証）を得ている。勤番が明け江戸在府の際には、寛政二年以前から師事していたとみられる中沢道二を屋敷に招き、聴

講している。また、寛政九年、京都二条城在番の際には、上河淇水（和庵を継いで明倫舎舎主）を招いて聴聞し、修養を重ねている。

これほどまでに心学に傾倒した直皓は、世子直興^{ナオオキ}へも心学教育を施した。享和二（一八〇二）年、その学識をもって、前出の藩士龜田弘人に直興の傳役を命じた。長じるに従い、直興は、道二・淇水に直接師事するようになった。

習輔、そして藩主直皓とその家臣たちによって、京都並びに関東の心学が須坂にもたらされた。心学の花が咲くのは、時間の問題である。

〔教倫舎設立期〕天明末（一七八八）年、須坂の中町に心学講舎教倫舎が設立された。これは、藩校として藩自身が設立したものであり、心学史上非常に珍しい例である。しかも、家中の藩士はもとより、農民にまで開放された施設であった。設立当初の都講には、中村習輔・興津湖山が当たり、続いて富田魯庵が都講となっている。

この期は、藩主直皓の強力な指導の下に、重臣が舎の維持運営に当たっていたと考えられ、清新の気に満ちていたと思われる。

が、魯庵の没後は都講が不在となり、一時停滞期を迎えたようである。

〔隆盛前期〕停滞を脱すきっかけになったのは、文化年間の藩校立成館の創設と沼目村名主大沢章兵衛への教倫舎引き渡しである。

立成館と教倫舎の建物は同一物であり、文政四（一八二二）年、藩は教倫舎の組織を章兵衛に預けた。いわば民間委託であるが、章兵衛は士分に取り立てられているので、藩の監督を離れたわけではない。章兵衛の心学修養の経歴は不明だが、名だたる蔵書家で篤学の士であつたらしい。藩士や農民さらにはその子供を相手に、月に二・三回の儒書講義をしていた。

なお、立成館は文政一二年に、折衷学の龜田鵬斎の門人・菊地行藏を迎え、藩校としての体裁を整えていく。が、行藏は江戸勤番であつたようで、須坂には同門の小松桐所が来ていたらしい。

章兵衛の活動によって、教倫舎と立成館とは完全に並立する形となった。

〔隆盛後期〕その後、章兵衛の子大沢弥兵衛と高梨村の医師中島元洞が活動の中心となり、両名とも都講を勤めている。

弥兵衛は、父の後を継いで名主となり、藩財政の建て直しに協力し、特に彼の作成した村方御触書は大いに効果を挙げ、その功により士分に取り立てられた。さらに藩から、恭安舎への留学を命ぜられ、中村翠軒について学んでいる。帰郷後は、父子二代の教倫舎の都講となり、天保一二（一八四一）年には、藩から正式に教倫舎を引き渡されている。後には、近隣の青年の熱望に答え私塾を開いてもいる。

一方の元洞も、藩内において心学の修養を積んでいたらしく、天保一四年に三舎印鑑を受けている。父忠右衛門は、明和九（一七七二）年付けという草創期の石門心学の断書を得ており、元洞の修養も年季の入ったものであったと考えられる。

このほか、日滝村の中村雄右衛門・藩士丸山与兵衛も都講となつた。

全国的にみると、心学が衰退期にあるなかで、独自に印鑑の発行をするなど、なかなかの活況を呈している。

この天保期は、京都との結びつきが強く、先の元洞の三舎印鑑下付のほか、京都から、近藤竜徳が二度（天保一三・一八四二）年と弘化元（一八四四）年）巡講に来ている。近藤竜徳は京都を主な活動地としており、京都時習舎講師を経て、天保期に京都に新設され

表3 信州須坂藩心学関係人物生没年表

		1710	1750	1800	1850	1900
京都・江戸の心学者	手島堵庵	1718		1786		
	中沢道二	1725		1803		
	上河淇水		1748	1817		
須坂藩主	堀直皓⑨		1755	1814		
	直興⑩			1793	1821	
	直格⑪			1806	1882	
	直武⑫				1830	1862
	直虎⑬				1836	1868
信州心学者	中村習輔	1732		1816		
	植松自謙		1750	1810		
松代藩	興津湖山	1718		1802		
須坂藩	大沢章兵衛					
	弥兵衛			1790	1849	
	健助					
	富田魯庵					
	中島元洞			1772	1846	
	丸山巨宰司			不詳	1834	
	舍人				不詳	1859
	石田知白齊				不詳	1855
	丸山与兵衛					
	中村雄右衛門		1769	不詳		
	和助					
	菊池行藏					
	亀田弘人					
巡講	近藤竜徳					

※実線記入のない者は、生没年不詳

信州心学関係事項	全国の心学	関 連 事 項
<p>67 湖山『一心棚卸』を著す</p> <p>71 習輔、堵庵（明倫舎）に入門</p> <p>77 習軸、信濃において心学教化活動開始</p>	隆盛前期	<p>79 道二、東下</p> <p>81 道二、参前舎、仮設</p> <p>86 堵庵没</p>
<p>86 頃、習輔、恭安舎設立</p> <p>87 湖山、匡直舎設立</p> <p>89 自謙、道二（参前舎）に入門</p>	隆盛後期	<p>89 道二、参前舎移転</p> <p>91 道二、参前舎、独立舎屋新設</p> <p>94 幕府儒官、道二の心学は朱子学の正統ではないと断</p>
<p>96 自謙、信濃に入って布教活動開始</p> <p>01 『一心棚卸元根草』出版される</p>	教勢分裂時代	<p>03 道二没、自謙、参前舎主に選ばれる</p>
<p>10 自謙没</p> <p>16 習輔没</p>		<p>17 淇水没</p>
<p>35 明孝舎設立</p>	衰退時代	<p>36 有隣没</p>

表4. 教倫舎関係略年表

	藩主	須坂藩心学関係事項	教倫舎
1750	⑥直		
1760	寛		
1770	⑦直		
	堅		
1780	⑧直郷	83 魯庵、道二より琢磨札を与えられる 86 弘人、道二より須坂での心学普及を依頼される 87、88 習輔領内を巡講	揺籃期
1790	⑨直	88 頃教倫舎設立 89 直皓、中井利安を招き、会輔を開く 90 直皓、断書受領 92 直皓、参前舎に地代金寄付（直皓、江戸で道二を招き聴講） 95 魯庵、淇水より『理学字義解』を贈られる 96 直皓、二条城に淇水を招き「御聖談」を聴聞 97 直皓、大坂城に淇水を招き道話を聴聞	設立期（一時停滞）
1800		02 弘人、直興の伝役となる（直興、道二・淇水に師事）	
1810	皓	07 直興、淇水より『朝倉雑談』を贈られる 11 立成館造営、教倫舎、民営となる	
1820	⑩直興	21 章兵衛、教倫舎を預かる（～28）	
1830	⑪直	29 行蔵、藩儒となり立成館を預かる 30 元洞、教倫舎都講となる（～44）	隆盛期
1840	格	41 弥兵衛、教倫舎都講となる。元洞、学問所（＝教倫舎）を預かる。藩が追認。 42 竜徳、巡講 43 元洞、三舎印鑑を受く 44 竜徳、巡講	
1850	⑫直	48 頃雄右衛門・和助教倫舎を預かる 50 知白斎、藩に招かれ村々を巡回	衰退期
	武	56 都講丸山与兵衛、道話巡講の廻村を命じられる	
1860	⑬直虎	61 藩政改革「小右衛門一派」処断、教倫舎閉鎖〈須坂藩心学の終焉〉	
1870	⑭直明		

た樂行舎の初代専属講師となり、のちにはその第三世舎主をつとめるなど、この時期に活躍した心学者である。

〔衰退期〕教倫舎の最後はあつてなくやつて来る。

嘉永年間は、日滝村の中村雄右衛門・中村和助が教倫舎を預り、藩士丸山与兵衛が都講を勤めていた。

当時、全国の諸藩は極度の財政難に悩まされていたが、須坂藩でも例外ではなく、財政改革の必要に迫られた。この時、家老丸山舎人・藩士野口源兵衛や、弥兵衛の子で沼目村名主大沢健助らは、農村復興と財政改革で高名な京都の心学者・石田小右衛門知白斎を招いた。知白斎招致は、教倫舎と直接の関係はないようだが、領内に心学が浸透していた土地ならではの方法と言えよう。勤儉節約と藩への献金を説いた知白斎の教諭は、一定の効果を挙げたが、悪化する藩財政を根底から救うことはできなかった。

知白斎に続いて、都講の丸山与兵衛も巡回教諭に出たが、知白斎に勝る方策を示すことはできず、踏襲するにとどまった。ために、度重なる献金の強要は農民の反感を買うことになり、心学が人心から離れていくようになってしまった。

舎人没後、野口源兵衛を中心とする勢力が、専横を極めるようになり、これを見兼ねた一三代藩主直虎は、文久元（一八六一）年、藩政改革の大なたを振るった。源兵衛ら汚職政治に加わった者は、みな「小右衛門一派」と呼んで処罰され、これに丸山与兵衛も連座してしまふ。与兵衛の処分は、藩籍を除かれ、下賜品等をすべて召し上げられるという厳しいものであった。

都講を失った教倫舎は閉舎され、これによって、須坂藩から心学が一掃された。藩主先導となり、心学史上に特異の例となった須坂藩の心学の末路はあまりにもはかないものであった。

なお、直虎の学問は漢学を経て、蘭学を杉田玄端、兵学を赤松小三郎・南郷茂光（淺津富之助）に学んでいる。その故か、洋式軍備や洋装に力を入れ、「唐人堀」と称されるほど洋風好みであった。

時代を開く学問の力がどこにあるのか、当藩の藩主は常に敏感に感じ取っていたようである。

【教倫舎の心学活動】 本節では、II章で取り上げる資料に関連する事項を中心に、教倫舎の心学活動を概観することにする。（資料は、大沢弥兵衛・近藤竜徳に関するものが多いので、記述の中心をそこにおく。）

揺籃期から、春秋二回の農閑期に、心学者が領内の村々を巡講していたが、この慣例は教倫舎設立以後も続けられている。教倫舎の都講はもちろんのこと、信州にやってきた他国の心学者も廻村している。

教倫舎設立期の具体的活動は不詳だが、都講中村習輔・興津湖山の出講が年に数回あり、二・七の日に教倫舎において心学修養が行なわれていたことが明らかになっている。須坂藩の領民に対する教化活動・教育奨励はたいへん積極的であり、聴講は士庶・男女の区別なく許されている。

隆盛前期、大沢章兵衛は、二の日に『孟子』『詩経』の講釈をしている。毎月二・三回の儒書講談が行なわれているのだが、教倫舎の運営組織については不詳である。

隆盛後期、教倫舎を預かった大沢弥兵衛らは、七の日に講釈を行なっている。（七の日は、藩校立成館の休日であった。）『大学』『中庸』などの儒書を取り上げたことが記録にある。また、弥兵衛は松代匡直舎に向いて自作の道話を話してもいる（天保一二〜一八四

一（年）。その折のものかは不明だが、彼の手に成る自作道話の草稿として、『恭儉についての道話草稿』が残されている。

会輔では、講釈や道話の聴講だけでなく、静座と問答も行なわれている。特に自己の日常生活を反省し、より実践的な生活態度を修養するために、問答は有効な方法であったと考えられる。資料も、『大沢弥兵衛問答控』『教倫舎問答』『心学問答ほか覚え』の三点がある。

このほか、天保一三（一八四二）年と弘化元（一八四四）年の二度、巡講にやって来た京都樂行舎講師・近藤竜徳関係の資料がある。二度の巡講のうちどちらの時に成立したかは不明だが、『近藤先生道話』『近藤竜徳の間・道話聞書』である。また、『道歌聞書』として弥兵衛が書き残した資料があり、近藤竜徳関係のものと言えそうである。

弥兵衛は筆まめであつたらしく、彼の手に成り、今日に伝えられているものは多い。

衰退期にも、二・七の日は心学道話の終日講釈、三・八の日は経書講義の定日とし、さらには都講丸山与兵衛の巡講が行われるなど心学講舎としての体裁を整えていた。

しかし、石田知白齋が去ってからの心学は、藩財政再建のための無理な献金活動と結びつき、遂には、藩主直虎による処断を受けることになる。この頃、「小石衛門一派」処罰までを歌い込んだちよばくれ（俗謡）『でんでんこうばなし』が作られている。

II 資料の紹介とその文章・文体について

現存する信州須坂藩心学（道話）資料のうち、本稿で、その言語を分析の対象とするのは、次の九点である。簡略に書誌的解説をし

ながら、一部を紹介し、その文章の性格・文体について考察する。

①『近藤先生道話』

副題に「跡にて復して書」とあり、近藤竜徳須坂巡講の際の道話を後になって、大沢弥兵衛が筆録したものと思われる。年号の記載はないが、天保一三（一八四二）年・弘化元（一八四四）年いずれかの年の巡講のものであろう。（あるいは、二度の巡講の内容を含む可能性もある。）

なお、近藤竜徳の詳しい伝記は不詳だが、この時期、京都樂行舎の講師として活躍した心学者である。

内容は、二四種の話題からなり（一部未完を含む）、娘や姉妹の孝行譚・女房の発心譚・猛女譚など説話風のもの、イソップ風の寓話、一行の警句や笑話、さらには『中庸』の一節の解釈等が盛り込まれた多彩なものである。聴講者への配慮か、娘や姉妹、妻や母など、女性を主人公にしたものが多い。編集意識がどれくらい働いていたかは不明だが、長めの話の後には、一行の警句や笑話、または短編物がおかれるという構成になっている。

次にその一部を示す。

○（前略）然る（に）おやい実父徳助方にて母親の離縁并病氣の様子聞娘おやへとりかへさんとて人を遣し仏事に有之候二付おやい遣し被下といふて遣しました。そこで庄兵衛も覚悟きわめ是かおやい（の）顔の見納と思ふて居りまするにおやいハと、さんかけ（ん）わるいから私ハ行ますまへといへまする

〔養女孝行譚〕

○ある人人の所へ行て何物よらす物の直段をつけけれハある人のいわくおまへハわるへくせにて人の物に直うちつけらる、ハよろしからすといへけれハ左様おつしやるハ百両の直うちちや

といへました

〔短編笑話〕

「でござります」や「ます」で文末をとじる道話特有の口語文体を基調とするが、一部に候文体を含んだり、また、訓読体の語彙を連ねる部分がある。また、仮名遣いにおいて、「イ」と「エ」の混同（傍線）が見られる。

②『近藤竜徳の問・道話聞書』

「近藤先生より承候御問」（②）と「近藤竜徳先生御道話聞書」（②）の二部構成の資料である。①と同じく成立年は不詳で、筆録者も判然としない。

『問』のほうは、訓読体の問四種と、訓読体と候文体からなる問答一四種という構成である。

○問 或人親を殺され其敵を討んと尋廻りして或所ニ而欠より下の大河に落入既に死せんとせし時誰不共知上より下りて髪のためさを取り助んとす 見れハ親の敵何某也 我を付ねらふといえトモ去是より我を討所存を止メなば一命助くべし 左無くハ手を放し沈むへしとなし 此時如何

○問 世界中ノ人ヲ助ル事如何

答 論語ニハ克己復礼時ハ天下仁ニ帰ス

○問 山ニ木数何木有ヤ

答 木ガ知テ居リ候

○問 楽ノ一番如何

答 天命ナリ 小人ハ無事ナリ

○問 思ふ事二ツのけたる其跡ハ花の都も田舎なるらん

答 名聞利欲ノ二ツナリ

話題の人物になり代わつての判断を求める問や、形而上的な問答が記されており、会輔の内容を窺わせる資料である。文体の故か、

仮名遣いにおける「イ」と「エ」の混同は、一例のみである。

一方の『聞書』（②）は、『中庸』一四章の一節「子曰。射有似乎君子。失諸正鵠。反求諸其身。」にちなんだ江戸時代初期のエピソードを紹介したものである。阿部甚太郎伊勢守が、家臣平田橘清澄に助けられて、奥州白石城主となるまでを訓読体を基調に書きつけてある。

（前略）既ニ將軍乗込給ハんとせし時阿部伊勢守家来団右衛門主人ニ向此時先陣被遊一命を捨名を末代ニ残し給ひ進め私も御供仕らんと終ニ無難ニ主従共ニ向ふ岸へ乗付けしに又將軍扇を上ケ差招かせ乗かへせとの思召なれハ不得止事即時ニ又乗入給へハ川の半とデ危く見へけれハ君舟を出し助よと 即舟を出しけれ共最早必死ノ覚悟なれハ其舟無用と難なく岸へ乗付けれ 君の御感不斜御褒美として御加増五万石頂戴都合十万二千五百石となり奥州白石之城主（後略）

③『道歌聞書』

安定した文体であり、方言的特徴は皆無である。

近藤竜徳作と思われる道歌を中心に、一一一首を大沢弥兵衛が書き留めたものである。成立年不詳で、一部脱落がある。

○くもりなき月日を常に持ちながら浮世のやみに迷へぬる哉

○わかもの、人のものしやというけれどみんなこの世の人の物なり

○人欲たといん方ハなかりけり富士の山にもいた、きそある
仮名遣いにおける「イ」と「エ」の混同（傍線）が認められる。

④『恭儉についての道話草稿』

成立年不詳ながら、大沢弥兵衛自筆の道話草稿である。「恭儉」をめぐって全一七の段落を納める。候文体を基調に「恭儉」について

説いた長文の序説的な段を冒頭に置き、以下、訓読文体・和漢混交体を主にした文体で、「恭儉」について考えられる個々の事例を取り上げている。また、一部に口語体を含んでいる。

○或曰くいきな若へ衆ハ恭儉の人を見て侮り嘲りて曰小ミちちやのしりのあなにみごのとおらぬ人なりといへり 是ハ全く自分ハ不埒放蕩ニて藪の下をこやす金銭を費す事をしれとも恭儉の人の道に随ふて孝行友弟の趣ある事をしらす 又時によりて道ある金をつかふ事をしらす 無理非道の金銭をとらざる事をしらす 目のなき人より見れハ藪の下も賑、敷けれども心ある人ハ是をほめんや 何ゆへとなれハ其するハ親をかなしましめ兄弟ニ不実なるゆへなり

生粹の須坂人である弥兵衛の資料ゆえ、方言的特徴を示す用例の記載が期待される。しかし、方言語彙は一語も含まれておらず、他の資料と同じく、仮名遣いにおける「イ」と「エ」の混同例(傍線)が認められるのみである。

⑤『大沢弥兵衛問答控』

「当座問の憶乗」と題された大沢弥兵衛の問答控である。年号の記載がないが、会輔の折々に書き留められたものと考えられる。三六種の問答(一部は問のみ)と、二種の警句がある。内容は、身近な事から、禅風の問、さらには形而上的な事がらに及びさまざまである。文体は、訓読体を主としながらも、文末に「ます」を用いたり、候文を交える場合がある。

○御問 からうすのあけさけすねて見すれとも 此後の句後よ
答 御開菩薩となりて人にふまるゝ 是御ひらきハ不承

しらせとならぬわか身はつかし 此ハ弥答

○問 本心ヲ御持参被成や又御持参無之哉

私ノ答 御心者一切承奉存候 折、心つけかへり見度奉存候

答 御問に依而本心ニ心付けます

○問 かきつばた 水のそこにもかきつばた とちらかけの 大木なるや如何

此火鉢 男力女如何 此問三度問

男にも女にもあらず 火鉢也

また、②『近藤竜徳の問』と同趣の問を含んでいる。

○キセルヲタテ、指ニテヲサへ此キセルトチラヘカヘルト問フ

②「問 扇子立テ何レイコロヒ候ヤ

答 手ハナシテ成ヘク候」

○問 名ハ何ノために付るや如何

②「問 人ニ当テ名ハトコニ付テ居ト問

答 吉兵衛ト云テ呼所也」

心学者一流の思考傾向による一致か、あるいは近藤竜徳の巡講を聞いての応用か、興味あるところである。

全体を通じて、仮名遣いにおける「イ」と「エ」の混合例がある。

⑥『教諭舎問答(その1)』

「悪の氣」「末の思案」「善光寺如来」「貧乏神と福の神」に関する四種の問答を納める。筆録者不明で、またいつの問答かも不詳だが、「御問」で「如何」と問いかけ、「御答」として「候」で受けるという形式が確立している。訓読体を基調にし候文を交える。次の⑦とともに、方言的特徴は皆無である。

○御問 題或人間性善成事を知る上に悪の氣さすは何故きさすや
御答 今日晴天なれとも俄に雲霧おこり候時ハ四海一面雨

や霞と成候与奉存候

○御問 朝倉百二十 如何なるをか貧乏神といふ いかなる

をか福の神といふ 此差別如何

御答 日夜朝暮怠らず受得たる業を相守り候時ハ福神 受

得たる業を舞念いたす時は是即貧乏神と奉存候

⑦『教倫舎問答(その二)』

筆跡の異なる独立した断簡八種をまとめたもので、「慈悲」に関する問答四種、「かげぼうし」の問答四種を含む。「如何一候」という問答形式にのっとっている。いつの会輔のものかは不詳である。

○御問 じひとはいかん

答 じひハ大きな心に御座候

○御問 慈悲トハイカン

答 専ら儉約ヲ可勤候

○御問 本心蔭ほうし如何

ものが

答 他念なく向ふところかけほうしと奉存候 久三郎拝

○御問 本心陰ほうし

答 善ト奉存候 利喜弥拝

⑧『心学問答ほか覚え』

「心学不学不可有」の題を持つ覚え書きで、筆録者・成立年とも不詳である。道歌・口遊・問・問答・単語の書き付けや『論語』の一節などのメモ等、四六種の事項が記されている。内容的には、釈迦を始め、仏教に関する問を多く納めているのが目立つ。

○欲深き人の心と降る雪ハ積り次第第二道を忘る、

○山ハ青く水ハ流てきよけれと其儘本の色にこそあれ

○恋こがれまれに逢ふ夜ハ独りねて別れて後に二人ねる

○福助ハ欲と勝手を忘れたか/福助は己が自由にじゆうかけ

て/頭大キが叶福神

○久米仙人女のはぎを見て神を失ひ候事如何

○扇ノ棒ハ三色内何カメシマスル

○大馬雀ヲ押テ問 生力死力 釈尊シキイヲマタイデ入ルヤ出

ルヤ

○釈迦出生ノ時天上天下唯我独尊云 世界皆如此如何

酒ヲ呑過去現ザイ未来心内何心ニ吞

○茶生寺云アリ 侍力茶屋ニテ休茶ヲノミカケニシテヲキ女夫

ヲノミ懐胎ス コノ者カ立タル寺ナリ

仮名遣いにおける「イ」と「エ」の混同が一例ある。

⑨『でんでんこうばなし』

「小右衛門一派」処断に至る須坂藩心学の低落を歌い込んだ俗謡で、文久元(一八六一)年に作られたものである。(作者不詳。)

俗謡であり、①⑧と違って、純粹の心学資料とは言えない。が、

須坂藩心学史上、見落とすことのできぬものであり、言語的に興味深い用例を含んでいるので、分析の対象とする。

是れさ皆さん聞てもくんない (中略) 借金あるとて石

田のいん居を小山江つれ込み心学ろんちて百姓たまして献金

だせとて大小御免の上下くれたり (中略) なんのかのと

てむやみに取立 (中略) 心学いうてわ用金献金むり銭取

立 (中略) しかるところい文久元年酉とし秋ごろそふり

うの甚六いんきうなされて四書にあるよな大覚どのとか御世

話なさつてりつばにのりだし御みつまわして家中のくせもの

町役見届け万壹同々よくくみさだめそれから江戸より御下

がりて丸山ほう木の青木のもりやら土やのおやじも其外たい

表5 資料一覧表

番号	資料名	成立年	講者もしくは筆録者	主な文体	備考
①	近藤先生道話	天保一三(一八四二) もしくは 弘化元(一八四四)	近藤竜徳講 大沢弥兵衛筆	文語 および 口語	道歌二首あり
②	近藤竜徳の間	天保一三(一八四二) もしくは 弘化元(一八四四)	近藤竜徳講 筆録者不明	文語	道歌二首あり
②	近藤竜徳の道話聞書	天保一三(一八四二) もしくは 弘化元(一八四四)	近藤竜徳講 筆録者不明	文語	
③	道歌聞書	不詳	近藤竜徳か 大沢弥兵衛筆	文語	
④	恭侯についての道話草稿	不詳	大沢弥兵衛筆	文語	一部に口語体を含む
⑤	大沢弥兵衛問答控	不詳	大沢弥兵衛筆	文語	道歌二首あり
⑥	教倫舎問答その一	不詳	不明	文語	
⑦	教倫舎問答その二	不詳	不明	文語	断簡
⑧	心学問答ほか覚え	不詳	不明	文語	
⑨	でんでんこうばなし	文久元(一八六二)	作者不詳	俗謡	

ぜい阿法ふに払れ家老のものどもなわめに及んて吟みの上に
てせつふくしろとのおかみの御上い (中略) 百姓なかせ
たむくいがきたやらしよし江ものだよ 百姓方でわをきに
喜び御年貢けんむでうれしい (以下略)

右に掲げた部分は、石田小右衛門知白斎が来須ののち、心学が藩
財政支援のための献金集めに利用され、献金の無理強いにあってい
た農民が、藩主直虎の藩政改革により、その苦しみから救われた喜
びを表しているところである。

俗謡ゆえ、他の資料と違い、この地方独特の方言的特徴を含んで
いる。仮名遣いにおける「イ」と「エ」の混同の用例 (傍線) に加
え、希望の表現「ナイ」、さらに方言語詞「ショウシイ」が見られる。
以上の内容をまとめると、表5のようになる。

III 言語の分析

本稿の目的——心学 (道話) 資料の言語における方言的特徴の有
無の調査——にてらすとき、もっとも注目すべきは、大沢弥兵衛関
連の資料 (①・③・④・⑤) である。(前掲表5参照)

この点をふまえた上で、まず、対象資料に方言的特徴がどの程度
認められるかを確認し、地域性の問題を検討する。続いて、全国区
の心学 (道話) 資料と共通する語法的特徴を検証し、中立性の問題
について考察する。

1、資料に見られる方言的特徴 (地域性の検討)

まず、II章の資料紹介でしばしば触れた仮名遣いの混同は、母音
「イ」と「エ」の音の混同がはなはだしいという、この地域の音韻的
特徴の表れである。(下段表参照)

資料	イ→エ	エ→イ	計
①近藤先生道話	五六	一一	六七
②近藤竜徳の問	〇	〇	〇
③道歌聞書	一二	一一	二三
④恭儉についての道話草稿	一五	〇	一五
⑤大沢弥兵衛問答控	六	一	七
⑥教諭舎問答その一	〇	一	一
⑦教諭舎問答その二	〇	〇	〇
⑧心学問答ほか覚え	〇	一	一
⑨でんでんこうばなし	四	五	九
総計	九三	二二	一一四

(1) イ→エの混同例

〈名詞〉いさかへ・いとまこへ・思へ・さへふ・ながえ (居)・身
びへき・ものいへ

〈動詞〉思へ・ならへ・争へあふ・いへきかす・すくへたすくる・
いへけれ・いへました・かよへ候・用へバ・随へて・ひつつへて

〈形容詞〉ありかたへ・をしへ・おもしろへ・かなしへ・きたなへ・
つらへ・なへ・よへ

〈助動詞〉あるまへ・行ますまへ・くれたへ・行て見たへ

「イ→エ」の混同例は、「エ→イ」の混同例の約四・五倍ある。し
かも、用例は①・③・④・⑤・⑨に多くなっており、⑨の俗謡以外
は、いずれも大沢弥兵衛関連の資料である。

品詞別にみると、動詞・形容詞の用例が多いが、形容動詞 (有て
へに) や副詞 (たかへに)、接尾語 (らしへ) の用例もあり、語につ
いても、助動詞を除くと、特定の語に集中しておらず、あらゆる語

に及んでいる。

(2) エーイの混同例

〈名詞〉おやい(人名)・いびす

〈動詞〉くわいん・たといん・称(とな)い

〈助詞〉何レイ・せけんい・寺イ・ところい

人名の「おやへ↓おやい」の混同例が一一例あり、用例数が多くなっている。これを除いてみると、動詞は下一段の語に、助詞は格助詞「へ」に集中している。

この「イ」と「エ」の音の混同は、口語文体もしくは講演という場に関係する資料でなくとも、現れる用例のようである。傍証資料として、宝暦一一(一七六一)年成立の『日暮硯』(注7)を見てみよう。本書は、隣接の松代藩家老恩田木工が藩財政の窮乏を救った折の筆録で、訓読体を基調に候文を交えている。(左掲表参照)

	イ↓エ	
日暮硯	エ↓イ	計
五	一〇	一五

(1) イ↓エの混同例

救へ・用へ・しへて・取計へ・候えて

(2) エ↓イの混同例

思ひば・使ひば・云ひ・ゆひ(故)・さい

このほか、母音「ウ」と「オ」の音の混同例が、⑨に一例(たらのへぬ)ある。これも、この地方の音韻的特徴である。

俗謡ゆえの用例だと思われるが、他の資料にまったく見られないのは、「イ」・「エ」の混同と対照的である。

音韻的特徴に続き、語法的特徴および方言語彙についてふれる。

①⑨の資料のうちで、語法・語彙の点で用例を持つのは⑨のみである。

〈語法〉希望の表現に「ない」を用いる。

是き皆さん聞てもくんない

三年此方須坂之小町のはなしを聞きな

〈方言語彙〉

しようし江(ショウシイ)ものだよ。

(以上一例)

*「ショウシイ」……恥ずかしい、の意。

これらも、道話と違い、俗謡なるがゆえの用例であろう。

以上、音韻・語法・語彙という点から、方言的特徴を調査すると①⑧の資料においては、母音「イ」と「エ」の音の混同がはなはだしいという音韻的特徴が見られた。特に用例の集中している①・③・④・⑤は、いずれも大沢弥兵衛関連の資料であり、彼の言語能力と深い関わりがありそうである。

弥兵衛は、領内の沼目村の名主の家に生まれついた人物であり、言語形成期を須坂で過ごしたと思われる生粋の須坂人である。となれば、当地の方言を身につけており、それを充分に駆使することができたはずである。しかし、資料に残された用例は、音韻に関する特徴のみで、語法・語彙に関するものは皆無である。これは、いかに理解したらよいことであろうか。

国語史においては、一般に「語彙・語法・音韻・文字」の順で、変遷度が高いと言われている。これは、個人のレベルにおいても、あてはまることであろう。すなわち、話し言葉にしろ、書き言葉にしろ、語彙選択や文体の変更は比較的容易になし得るものの、いったん身についた発音や文字の書き癖の克服は、難しいものである。弥兵衛個人においても、語彙・語法については、道話の形式にの

つとることができたものの、音韻的事項では、自己の身についたものを捨て去ることは困難であったのだろう。それ故、京都樂行舎講師近藤竜徳の道話（資料①）を復元する際にも、「イ」「エ」の音の混同をおかすことになったものと考えられる。

語彙・語法に関する特徴は、やはり地域に密着した俗謡のような資料に求められることになるであろう。

地方区の資料であれば、その地域の方言的特徴（特に方言語彙）の多く認められることが期待されるが、心理学（道話）資料の言語においては、多くを期待できないことが確認できた。ひるがえって言えば、地域性の色合いが薄いわけであり、中立的な条件を備えているということになる。

2、全国区の心理学（道話）資料と共通する語法の特徴

〈中立性の検討〉

表5に示したごとく、道話の口語文体を含む資料、①『近藤先生道話』と④『恭儉についての道話草稿』を中心に語法の特徴をみていく。語法における中立性を検討するために、音便形・融合形・助詞・助動詞・文末辞および形式語・副用語の観点を設ける（注8）。

（1）音便形

一般には、ウ音便は京阪語の、促音便は東国語の特徴とされているが、出自としてはこのとおりでも、抄物や道話の言語分析においては必ずしも有効な指標とはならない（注9）。ウ音便は当時の規範とも仰がれた京阪語の特徴として、広く受け入れられていた形跡があるし、促音便も漢籍の読みなどから一般に普及していたと考えられるからである。

したがって、道話には、ウ音便・促音便どちらの用例も見出すことができるが、それは、地域性を示すものでない。

①・④の資料からは、ウ音便の用例のみが拾える。

① いふておる・思ふたら・おふうて行て

④ 随ふて

（2）融合形

そもそも道話に現れる融合形は、種類も現れる度数も多くない。

融合形の助詞「じや（↑では）」・助動詞「じや（↑であ）・しやる（↑せらる）」以外は、あまり用例がない。

①・④の資料においても、助詞「じや」・助動詞「じや・しやる」の用例以外は出てこない。

① ひとりしやゆかぬ（助詞）

一人豊後の人といふ事しや・どこのものちや（助動詞）

かこ（駕籠）にのらしやれ（助動詞）

④ 勤検の御徳ちや・然ハそうちや（助動詞）

（3）助詞

道話において現れる助詞のうち、現代口語と異質なものは、接続助詞の「いで・とて」及び終助詞の「の・へ」と言われている。

①・④の資料には、これらの例がない。特に、上方特有の助詞とされる「いで・の・へ」がないのは、地域性を超越しており、それだけ中立性が高いと言えよう。

（4）助動詞

「じや」の頻度が最も高いのが、道話の特徴である。

先の融合形のところでみたように、①には「じや」の用例がある（「しや」四例、「ちや」四例、計八例）。

一方、④では、文末を多く「候・ナリ」もしくは活用語の終止連体形で閉じるため、「じや」を含んでいない。

（5）文末辞および形式語

道話で最も普通に用いられる文末辞として、助動詞「ます」、補助用言「ござる・ござります」、存在詞「でござる・でござります・である・でない」、形式語に接続助詞「ゆへ」等がある。

まず、文末部分にかかわるものからみていく。

①の文末部分において、口語系のもは左掲の表のとおりである。

語形	例数	用	例
ます	一三	御奉公を致します・居ります	
まする	五	泣きます・あん(じ)まする	
ましよう	三	こられました(や)う	
まし	一八	いひました・あたへました	
ござります	五	さればて御座ります	

全編にまんべんなく使われているわけではないが、「ます」系の文末が多い。これは明治期の演説の特徴であり、「道話→演説」と連なる要素の一つと言える。

一方の④は、文末が「候・ナリ」等であるため、口語系の形式語が文末に現れることはない。

接続助詞については、①に「ゆへ」のほか、「から」の例がある。

出て被下てハこまるから・迷わく致しますから・とるつもりなるから

森岡氏は、「から」の使用に江戸語の要素があることを懸念されているが、(注11)、講者近藤竜徳の活動地域(京都・信州他)を考慮すると、道話の場においては、一般化していたとも考えられる。他の道話での確認を急ぎたい。

(6) 副用語

文章語の色彩の濃い接続詞と副詞、話し言葉の色彩の濃い接続詞と副詞が、混在するのが道話の特徴である。

①は、混在が認められるものの、全体的に文章語の色彩の濃い副用語が多い。「然らハ・されとも・夫故」などの用例が多く、話し言葉の色彩が濃いものは「そこで・わつと」くらいである。

④は、「然るニ・然共」など、文章語の色彩が強く、話し言葉の色彩の濃いものは無い。

また、副用語の方言語彙を含む道話もあるが、①・④ともにその例は無い。

以上、音便形・融合形・助詞・助動詞・文末辞および形式語・副用語の観点から①・④の資料を分析してみたが、全国区の心学(道話)資料と共通する点が多く認められた。よって、語法における中立性が確認できたことになる。

IV まとめ

心学(道話)資料の口語が、中立性の高いものであることを検証するため、あえて地方で成立した心学(道話)資料を用いて、その言語の性格を考察することにした。

資料として信州須坂藩心学(道話)資料の九点を扱い、方言的特徴および語法的特徴について分析してみた。

その結果、方言的特徴は、母音「イ」と「エ」の音の混同がみられるという音韻的特徴以外は皆無であった。また、語彙・語法に関する特徴も見られなかった。音韻上の癖は克服し難いことを考えると、方言的特徴は、文体の面で希薄であるといつてよからう。

①の資料については、講者近藤竜徳が京都関係の人物ゆえであるとの反論も予想されるが、「跡にて復して書」いたのが、生粋の須坂

人である大沢弥兵衛である。その気になれば、方言を駆使して書くこともできたはずである。しかし、そうしていないのは、道話の文体（文語・口語とも）がすでに安定しており、地方でも受け入れられていたことの証明であろう。

語法的特徴においても、全国区の心学（道話）資料が持つ特徴を逸脱するものではなく、逆に全国区の資料が持つ、京阪語や江戸語的特徴も持たぬ点もあり、それだけ中立性の高い面がうかがえた。

以上のことから、資料の成立地、作成者の出生地や活動地域といった書誌的な面での相違は、心学（道話）資料の言語に決定的な影響を与えてはいないことがわかる。よって、その言語は、位相性も無く、方言的特色も希薄な中立性の高い言語ということができる。

須坂藩では、藩主自らが心学を学び、藩士はもとより、領民までが心学に親しむことになった。ということは、位相に関わらず、資料に残された硬軟各種の文体に触れていたわけである。心学の果たした役割は、言語の面においても誠に大きいと言わねばならない。

江戸時代は決して「封建的」の一語でかたづけられるような時代ではない。明治以降の近代の準備期間と見る歴史家もある。いみじくも国語史では、中世を境にそれ以降を「近代語」と呼んでいる。言語においても、道話や講義のように実用的な面では、全国に通用する語法・文体を備えたものがあり、次の明治期の共通語普及の下地を形成していたとみてよからう。

注1 森岡健二氏「口語史における心学道話の位置」『国語学』一二三

一九八〇年十二月） * 同氏現代語研究シリーズ第五巻『文体と表

現』（明治書院 一九八八年七月）に所収。

注2 拙稿「抄物の語法——「抄物共通語」の存在について——」（『上

智大学国文学論集』二二 一九八九年一月） 資料には、関西系の

抄物として周易抄・孟子抄を、関東系の抄物として碧巖大空抄・永平元禪師語録抄・碧巖集再吟を用いた。

注3 注1文献、一〇八・一〇七頁。

注4 石川謙氏『石門心学史の研究』（岩波書店 一九三八年五月）三〇二頁。

注5 『長野県教育史』第七卷（長野県教育史刊行会 一九七二年三月）に活字翻刻所収。同書には、道話以外の教諭舎関係資料（印鑑や書簡など）も収録されているが、本稿では、道話資料（聞書・道歌・草稿・問答・問答控）のみを分析の対象とする。

注6 本章の記述には以下の文献を参照、引用させていただいた。史的事実に関しては、これら先学の業績に加える新発見は今回なく、多くを湯本豊佐太氏の論考によっている。

* 全般及び信州心学史関係

竹中精一氏「石門心学」『平凡社大百科辞典』一九八五年

石川松太郎氏「心学」『国史大辞典』第七卷 吉川弘文館 一九八六年十一月

石川謙氏『石門心学史の研究』（岩波書店 一九三八年五月）

土屋弼太郎氏『近世信濃文化史』（信濃教育会出版部 一九六二年十二月）

中村一雄氏編『新信濃風土記 信濃——長野県の歴史と風土』（ジヤパン・アート社 一九七二年七月）

小杉巖氏『信州回想——随想と論文——』（信濃教育会出版部 一九七四年一月）

『長野県教育史』第一卷（長野県教育史刊行会 一九七八年三月）

『長野県歴史人物大辞典』（郷土出版社 一九八九年七月）

* 須坂藩の心学・教諭舎の心学活動関係

『長野県上高井誌 歴史編』（上高井教育会 一九六二年十二月）

『須坂市史』（須坂市史編纂委員会 一九八一年三月）

『須坂市人物誌』（長野県須坂市役所 一九六六年一月）

千原勝美氏『信州の藩学』（郷土出版社 一九八六年七月）

湯本豊佐太氏「石門心学 教諭舎に関する覚え書 一・二」（『高井』

高井地方史研究会 四六・五一 一九七九年一月・一九八〇年四月）

注7 西尾実氏・林博氏校注『日暮硯』（岩波文庫 一九四一年七月）により調査。

注8 森岡健二氏の方法による。注1文献参照。

注9 森岡氏注1文献・拙稿注2参照。

注10 以下、各観点の道話の特徴は、森岡氏の指摘による。注1文献参照。

注11 注1文献、九九頁参照。